

復命書  
軍艦海門沖繩群島探檢并

參謀部

部長



第一課



第二課



主事



洋寫

校合



發付

九月廿日



年月日

主務

真案者

決裁濟

大臣

次官



主事



無人島探査ノ儀ニ関シ本年一月廿七日付甲申  
十六號ヲ以テ上申取成テ續六月二日付左身申一  
一八五子ヲ以テ及通條官ノ如今般別紙ノ南  
大東島外一島探査ニ関スル報告書進達有ク

官房第二七六号

在條写及送付也

廿五年九月二十三日

次官

中尾純子

大臣

參謀部長

第一課

第二課

第三課

佐第一五〇八號 四

次官

主事



南北大東島外島探檢義御届

沖繩縣下南北大東島外五島探檢義義曩

主電信ヲ以テ御下命相成美舟軍艦海門ヲシテ

探檢ニ從事セシ候處現今迄々季節險惡

為ニ此際ハ南北大東島及ヨシ島ニ探檢ヲ

終、其結果別冊之通報告書提出致候

最モ其他ハ好季節ヲ待テ再ヒ着手ニ探檢ノ

上詳細報告可致美右南北大東島外島

探檢報告書並ニ畧回相添此段及

御届美也

明治廿五年八月廿日

奉 報 出

我御届  
候義義曩  
海門ラニ  
節險悪  
三探檢ヲ  
出致候  
三探檢ノ  
島外島  
此段及



1126

奉教告、沖繩縣甲分十六号  
申、對レ回縣、通報有レ  
万一千九百零七年七月

三探部



参謀部

別紙無人島揮換報告書

昭和四年八月十三日

海軍省

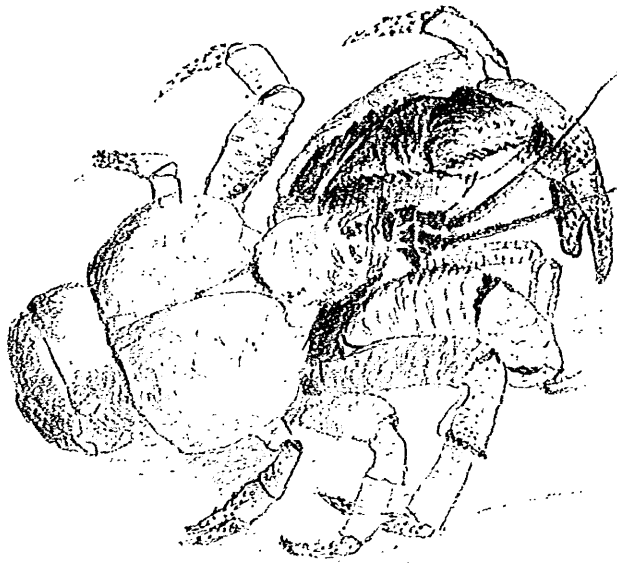


佐世存鎮守府司令官林清原殿

八月



大東島山蟹之図



海軍



北大東島

北大東島 東ノ十一里ニ見ル

北大東島

北大東島

東ノ七里ニ見ル

北大東島

東南ノ五里ニ見ル

N71E

N60E

北大東島

N7E

北大東島

北大東島 南西ノ八里

北大東島 南東ノ五里ニ見ル

無人島探検報告書

明治二十五年七月二十七日午后一時三十八分拔錨長崎港ヲ発シ二時十分將ニ高鋒ヲ經過セントスルニ及テ機関ニ軋熱ヲ起シ為ニ針路ヲ轉シ高鋒ト立神岬トノ間ニ夜泊シ直ニ機関ノ調整ニ取掛ル午後十一時頃至リ更ヲ終フ

全二十八日早天ヨリ不稳ノ徴アリ甚ク不安心ナリ故暫ク出帆ヲ見合セテ午後一時十五分端艇ヲ下シ航海士志摩少尉ヲ長崎測候所ニ派遣シ警報ノ有無ヲ問合タル處今朝九時発シ東京通信ニ日本北部若クハ朝鮮海ノ近傍颶風ノ徴アリト來報アリシ趣ヲ來知セリ依テ本日ハ出帆ヲ見合セタリ

全二十九日午前六時拔錨牛深ニ向ヒ發航スルニ機関ノ調整ヲ試ムル目的ヲ以テナリ午後四時頃全地へ投錨候泊ス

全三十日午前六時拔錨出港凡ソ五六哩ヲ行進スルニ及テ更ニ機関ノ故障ヲ生シ再ヒ牛深港ニ投錨候泊セリ此ノ故障タル流

罐ノフストツアバレフノノハンドレ破損シタルヲ以テ一旦蒸氣ヲ  
 惹レ止レカ修理ヲ要セリ本日午後ニ至リ右修理ヲ終レリ  
 今三十日午前六時抜錨出帆ニ針路ヲ定メ沖繩縣那覇  
 港ニ向エリ

八月一日終日航行海上ニ暴風ニシテ時々驟雨ヲ来スモ波浪高カ  
 ラス

今二日未明ニ始メテ伊平屋島ヲ望ミ九時四十分那覇港ニ抜錨ス  
 後チ副長中尾大尉ヲシテ縣令ヲ訪問シ傍チ今回乗人島探  
 見ノ為ノ回航ノ事由ヲ陳ヘ且ツ縣廳チノ人員派遣等ノ有無ヲ  
 概議セリ  
 檢官榮熱ノ為チ入中府代理右チ副長歸報ニテ百ノ縣令ニ即  
 近々交代退廳ノ趣ニテ面會ヲ遂ス依テ書記官檜垣直枝氏ニ面會  
 懇々概議ニ及チテ處彼大東島ノ如キハ既ニ兩回モ踏査ヲ遂ケ  
 タレニ付今日ニ於テハ別ニ踏査員ヲ派遣スルノ必要ナシ時宜依テハ

談島開墾志願者ノ中而三名ヲ依頼ニ及ラズ難計其他談島開ス  
 ル從來ノ経歴ハ別冊帳簿ニ就テ氣知アリタシ云々ノ挨拶ヲ別縣廳  
 ニ於テ必要ノ目的モ製シ察セラレタリ兎角談帳簿ハ参考ト  
 シテ備用ニ承レリト斯ニ於テ摺官縣廳ノ挨拶ノ甚ク冷淡ナルヲ  
 怪ルイテ右ノ帳簿ニ就キ從來ノ経歴ハ仔細ヲ調査セシ縣廳冷  
 淡ナル固ヨリ怪ニ足ラズ右與人島踏査ノ件ニ付テハ曩ニ明治六年頃  
 内務大臣ノ内命ニ依リ協同汽船會社所有出雲丸ヲ雇入リ親シク  
 東島以下諸島踏査ヲ実施セシメ其ノ報告等モ可ナリ詳察ナル  
 モ、數通 アクテ今ヤ探見ノ必要モ思ハリス依テ旁々察スル處  
 或ハ本縣廳ヨリ上申ノ趣旨ト海軍省ノ命令トハ稍々相齟齬  
 シ處ナキヤノ疑惑ヲ生シタル以テ豫テ備用書類ヲ撰テ少シク質問  
 要スル件アリ右關係ノ廳員一名乘船アリテ右縣廳ハ照會セリ  
 今三日午右時頃檜垣書記官並沖繩縣屬石田故義同律承艦係

竊若後カシ面會ノ上立ノ要領ヲ質問ス

一 本縣附近 與人島探檢ノイタリ去ル明治十八年頃始メテ本縣令ヨリ内務大臣へ具申ノ末右探檢ノ為ノ軍艦ヲ派遣スルヲ府縣令自ラ之ニ采組ニ出張スヘキ指令アリシモノ如シ

二次ヲ本縣令ヨリ右探檢ノ要領ヲ伺定サレ且ツ海軍大臣へ軍艦派遣ノ成ハ少ク蓋十日間以前ニ其ノ出帆ノ報ヲ得タキ旨上申サレタル者ノ如シ

三 其内務大臣内命ニ依テ該同後船會社所有出帆モヲ雇入ル縣屬等數者ヲ派遣サレ南北大東島久米赤島魚釣島久場島ノ五島精密ニ踏査ヲ行ハレタル者ノ如シ

四 以上ノ事實ニ依レハ明治南洋探檢ノ二島ヲ除キ他既ニ與人島探檢時期経過セシ者ノ如シ

然レ本年月ニ至リ更ニ與人島探檢ニ海軍大臣へ具申サレタルハ

抑モ何ノ目的タルモ是迄未踏査ニ遂ケ得サレシヨサレ島並南波

照間島ニ島ヲ探檢サレトノ至意ナルヤ或ハ踏査既済ノ諸島

於テ其位置周回等ヲ精測サレシトノ義ナルヤ今海軍大臣ノ命令

及鎮守府長官ノ訓令ノ意ヲ察スルニ本縣ノ事實ト少シク相齟齬スルヤ

疑アル以テ仔細ノ説明ヲ承知シタリ

檣垣書記官等ヨリ本縣ニ傳テ自縣令在樹氏ノ意中ニ出タルモノニシテ本

縣ノ其ノ意ヲ説明シ難シ困テ應退艦ノ旨縣令ノ意見ヲ聞キ何分次第確

シ陳シト且退艦セリ右テ戸田属舟ヒ未艦也説明ノ大意ニシテ

一南北大東島ノ景既ニ西向踏査ニ遂ケ其地勘風土等モ細調査セシラ

以テ今ヤ探檢ノ必要ナシ

ニ本年月海軍大臣ノ見申ノ本首ノ從前<sup>未</sup>承着手ノ迄南波照間島ノ

探檢ニ於テ米赤島魚釣島久場島ニ島ハ先キ踏査不充分ニ為右

ニ島探檢ノ存シ以テ今應探檢サレトノ至意ニ外ナラス

三つ近南彼照間之島ハ位置ヲ判明セラルルニテ其有奥リハ確然タラス

故ニ雇船ヲ以テ之ヲ探検スルモ到在其次効覽東志係ラ右ニ島ノ探

検ハ之ヲ海軍ニ艦ニ依頼セシ所以ナリ

此官極明ヨク若シヨシ島以下ノ諸島ヘ向テ軍艦ニ各航ノ際ハ本縣廳ヨリ

更ニ踏査員ヲ派遣サル積リナク如何戸田属者ヨリ白ウ書記官ノ意見

ニハ其等ノ一ノ新縣令赴任トシテ其ノ所見ニ從フ積ナリト然ラハ本艦

免ノ角モ海軍大臣ノ命令及鎮守府長官ノ訓令ニ從ヒ明日午前

大東島ヘ向テ發航ス可キ付キ其ノ旨ヲ書記官ニ告ケラレシト言ヒ終

テ同人直ニ退艦セリ右ヲ熟ク慮リ南北大東島ハ前後兩向モ踏査ニ從

ク其報告書モ頗ル詳密ナシモノヤリトモ今ヤ該島ノ探検ハ不要ナル如ク然レ

鎮守府長官ノ訓令固ヨリ勅カス可ラス且ツ其ノ地勢地味等ノ調査ハ已ニ

間然ナシ生スルモ其ノ位置ヲ確明シ海岸ノ状況ヲ觀察スル一丈又ハ幾

益ノ事業ト言フヘカラス獨彼南彼照間島久米赤島等ノ諸島ノ如



キハ位置判明セサルノミナラス其ノ有無未タ確定ナラサルモノアリ是等  
 ノ探求ハ固ヨリ短日數ノ能ク為シ得キ處ニアラズ殊ニ縣廳ニ於テモ新  
 縣令ノ赴任ヲ俟テ事總テ其ノ所見ニ隨ハントノ趣旨モカリトセハ高  
 夕彼ノ諸島ハ未嘗好時候ヲ俟テ着キセラルニ方得策ナリ因テ今  
 回ハ先ツ南北大東島及ミ道島ノ三島ヲ探見シ其ノ結果ヲ報告  
 スルニ決セリ

全四日午前八時三十分拔錨出帆沖繩島ノ南角ヲ廻リ全十一時  
 針路ヲ四四ニ定ム南大東島ニ向リ此日天候晴朗波靜穩ナリ  
 全五日午前七時始メテ南北大東島ヲ左舷艦首ニ望ム此片既ニ十四五哩ノ  
 内ニテ地勢平低ナルヲ以テ遠望甚々難ク其遠見ノ状即チ別圖ノ如クナリ之  
 ヲ本島ノ南角ニ向テ航進ス九時三十分既ニ海岸ヨリ九三哩許ノ位置ニ達ス後  
 半速トシテ沿岸伏礁ニ注意セリ九三哩許ニ接近スルニ及テ針路ヲ北ニ轉シ島ノ  
 西側ニ沿フテ徐々ニ進行ス此時南西風ニ到底南西ノ内岸ニ上陸ス難ク

察之北西<sup>若</sup>北東ノ海岸ノ適當ノ上陸点ヲ撰テ自的ノ後々島ノ北西角  
 即チ目標ノ在ル処ニ達セシメ沿岸何レモ高峯ニ峻嶮ナリシラス此辺波浪  
 格差容易ニ上陸ニ得ヘキニテ依テ針路ヲ次第ニ東ニ轉テ南北兩島ノ間  
 ヲ徐々ニ經過シ北東角ニ至ル此処稍ヤ弓灣状ヲナシ海岸モ全ク風下ニ在テ  
 波浪自ラ静ナルヲ発見ス因テ斯ニ行進ヲ步上陸ノ用意ニ掛ル時既ニ十時  
 ハ多ナリ上陸員ハ左ノ如ク定メ之ニ与ル訓令及信号等ヲ如ク

上陸員入名

- 一士佐 鹿名 航海士海軍少尉志摩 猛
- 一少尉候補生 海軍少尉候補生 千秋 恭次郎
- 一少軍医 鹿名 海軍少軍医 田辺 貞次
- 一水兵四名 黒木、吉野、菊地、高橋

端艇

一 莽一カッター

一端 船指揮

分隊士 海軍少尉 松井健吉

一端 船員

水兵 拾参名

訓令

航海士の陸上ニ在テハ候補生以下水兵ヲ指揮シ尤ノ事項ヲ探検スルニ

一 艦ノ位置ヲ測度シ目標ヲ建設スル

一天測ノ余暇ヲ以テ沿岸ノ状況港灣ノ有無等ヲ視察スル

一 水兵ニ名宛ヲ一組トシ凡ク方位ヲ指野ニ内地ニ汎造ニ草木ノ種類鳥獸類ハ

河川湖沼等ノ形状ヲ視察セシムルノ但シ六時間ヨリ長時間ノ距離ニ進

ムカラス

一 異状ヲ携帶ニ候ナルモノハ成ヘリ持参スル

一 本艦ノ所在及信号ニ成ヘリ注意スル

少軍医ハ左ノ事項ヲ探検スル

一飲料水ノ多寡ヲ良否

一風土氣候ノ状況等

端艇指揮ハ左ノ事項ニ注意スル

一端艇及上陸員ノ安全ヲ保持シ危候ヲ侵カサル

一孤島負上陸ノ上ハ成ヘク速ニ帰艇スル

一若シ本艇ヲ離ルノ后ヲ帰艇ニ能ハサル場合ハ航海士ノ一行ノ共ニ陸上ニ

停ルル但此場合ニ於テハ信号ヲテ本艇ニ通知スル

本艇ノ端艇備着ノ上大東島ノ周囲ヲ一面ニ沿岸ノ状況ヲ視察シ或ハ縦横ノ里程ヲ概測スル等ノ事業ニ掛リ右終ラハ時刻ヲ量リ同島向テ発程ス但シ天候ノ都合依テハ臨時進退ヲ変更スルアリ

本艇ノ陸上ノ仮定信号

本艇ヨリ

一大砲一発「サイ」ニ長声三回 本艇直ニ大島ノ発航陸上員ハ其傍ヲ

一大砲三発「サイ」ニ長声三回陸上員ハ直ニ本艇ニ歸シ

其他ハ海軍信号ヲ用ユ

陸上ヨリ

一 軍艦旗上下

端艇帰艦ニ難シ

一 軍艦旗ヲ左右ニ振ル

測量終ル端艇送シ

夜中

應接ヲ待ツ

一 小銃連發ノ夜火箭一發

但シ火箭ノ代リニ号火ヲ用ルルナレトシ

本艦ヨリ信号ハ成ヘクナレトシ其他ノモノヲ振リ應答スヘシ夜中ハ小銃ニ三回ヲ發

スヘシ又月中ハ成ヘク手旗其他ノモノヲ以テ不区信号ヲ用ユ可シ

午前十一時十五分端艇ハ本艦ヲ南陸岸ニ向ヘリ此間本艦ハ沖合ニ漂流シ端艇ノ歸

艦ヲ待ツ午後三時ニ至リ端艇歸艦依テ南大東島ノ凡北東角ヨリニシテノ

方向ニ進行シ時々重測鉛ヲ投シ海底深淺ヲ測ルル所本島ノ南東角ニ至リ針路ヲ

北西ニ取リ凡南側ノ岬角ヲテ之ヲ測ルル所五十五分ニシテ海底ニ達セズ且ヨリ本島ノ縦横

里程ヲ測リタルモ不充分ニテ確實ナラス然レモ延長五哩幅員三哩位ト推測ス之即從來  
 海圖ノ記スル処ト大同少異ナリ之ヲ更ニ南大東島ト北大東島トノ距離ヲ概測セシニ六哩  
 2/4 ヲ得タリ之亦多海圖ト相ホ同シ之等ノ事業ヲ終リテ既ニ午後七時ナリ  
 之ヲ針路ヲシテ定メテ島ニ向ヘリ此日終日天候晴朗ニシテ波濤極メテ  
 靜穩ナリシニ事業ノ為ノ實ニ幸福ヲ得タリ

今六日今朝午前六時頃ニ必ス「ラサ」島ヲ十哩以内ニ望見スル豫期ナリ  
 シモ同時ニ至リ更ニ島影ヲ見ル能ハス本日ハ天候晴朗前日ニ異ナラサル  
 ヲ以テ本島ノ位置確實ナルニ於テハ何レモ望見シ得ヘキ筈ナルニ今尚  
 之ヲ望見シ得サルハ如何ニモ不審堪サリシ依ラ今八時ニ至ルマテ同針路ヲ維  
 持シ愈ヨ進行セシモ尚テ眼界入ルモノナカリキ此時天測ヲナシ經度ヲ測リシ  
 ニ東經百三十一度二十二分ヲ得タリ由之察スルニ本艦ハ潮流風力ノ為メ大ニ  
 左方ニ変位セシヲ知ル然レモ海圖上ニ記載スル処ノ該島ノ經度ト相ホ  
 相合レキヲ以テ之ヨリ針路ヲ及ヘシ左右ニ九十里ツノ斜線ヲ乘リ漸ク

退行ヲ試シ時既ニ正午ニ達ス因テ子午線緯度ヲ測定セシ北緯二十三  
 度五十六分東経百三十一度二十九分一秒ヲ得タリ之ニ由リ推測スルハ  
 蓋ス該島ノ位置ヲ接近セルヲ知ル故ニ愈ヨ蓋ス同針路ヲ進行セシニ  
 午後一時四十八分ニ至リ始メテ九艘四隻許ノ方位ニ當リ影ヲ察覺セシ針路ヲ  
 變スルニ妻ス大ニ其位置ノ不正ナルヲ疑フ從テ是九十二哩ヲ進行セシ  
 テラ世島ノ南東角ニ達セリ因テ離岸最遠哩數ノ位置算出ニ着手ス  
 五十尋ノ重測鉛ヲ投下セシ海底ニ達セリ因テ直ニ鉛ヲ卸シ上陸員ハ  
 遺ノ準備ヲナシ四時端艇ハ本艇ヲ離レ陸岸ニ向リ此中上陸ヲ余ニタ  
 ル人算及前念丸ノ如シ

上陸員人名

一士官一名 二番分隊長海軍大尉山下源太郎

一水兵二名 西村 天野

端艇

一 第二カッター

一 端艇指揮

分隊長海軍少尉武部岸郎

一 端艇員

水兵十三名

訓令

分隊長ハ隨行、水兵ヲ指揮シ左ノ事項ヲ視察探検スヘシ

一 海岸ノ狀況、港灣、河沼ノ有無及鳥獸、草木等ノ種類

一 異狀ミテ携帶、便ナル者ハ成リトク持參スヘシ

一 上陸後三時間以内ニ歸途ニ就クヘシ

一 本艦ト陸上トノ信号ハ大東島ニ於テ定メタルモノト同シ

一 陸岸適當ノ位置ヲ櫻ヒ携帶ノ標本ヲ建立スヘシ

端艇指揮ハ左ノ事項ニ注意スヘシ

一 端艇及上陸員ノ安全ヲ保持シ危險ヲ侵カサルコト

一 着岸ノ上ハ三番分隊長ニ隨ヒ島内ヲ視察スヘシ

本艦ハ沖合ニ漂泊シ端艇ヲ歸着ラ俟ツヘシ



本艦ノ同位置ニ漂泊中其周田ニ鱧魚ノ非常ニ群集スルヲ見ル依リ誠ニ  
 艦内備附ノ漁釣ニ條ラテ下セニ凡一時間許ノ間ニ鱧魚十三四尾ヲ釣獲セリ  
 其大サ凡六七呎ミテ忽チ艦内ノ一部ニ堆積スルニ至ル之ヲ以テ察スルニ本艦海  
 近鱧魚ノ多キ實ニ驚ニ堪ヘタリ午後六時四拾八分端艇帰着直ニ之ヲ  
 引揚ゲ全五十五分撥開ノ運転ヲ始メ時既ニ黄昏ニ迫リ且ツ本艦周田  
 意外ニ狭少ニ其地勢モ大東嶺ト更ニ黒クナキヲ以テ周田概測  
 等ノ事業ヲ廢シ直ニ南大東嶺ニ向テ進航ニ斜路ヲ以テ此日天  
 候平穩ニシテ諸事業柳カ困難ヲ感セス

今七日午前四時五十二分南大東嶺ヲ右舷艦首ニ認ム六時五十三分既ニ  
 同嶺北東海岸ニ近適セルヲ以テ例ノ如ク本艦ヲ漂泊シ先ツ大砲ヲ三発カキ  
 長声三回ノ信号ヲラシ陸上へ歸艦ヲ通シ右ヲ直ニ第一カッターヲ卸シ陸  
 岸ニ送リ十時十分端艇帰艦ス依テ之ヲ引揚ケ行進ヲ始ム之ヲ北大  
 東嶺東北端岸ヲ周田ニ斜路ヲ以テ大嶺ニ向テ

左日午前五時右形艦首大駕ヲ大形艦首徳ノ駕ヲ見テ十時十五分大駕返  
峽ノ東口ノ邊ニテ終過スナニ時四十分公慈湾内ニ入リ埒内ヲ廻シテ再ニ海峽ノ西  
口ニ出リ是ヲ斜路ヲミテ川内ニ取リ名瀬港ニ向テ該港ニ於テ飲料水貯蓄  
ノ見込ヲ以テナリ午市四時四十分投錨寄泊ス

左九日同港滞泊

全日午前八時十五分投錨出艦斜路ノ外ニ定テ依世保軍港ニ向テ此日天  
候清朗風向東ニテ好須風ナリ

左十日零時四十分依世保軍港一投錨寄泊ス

南北大東駕多クサ駕取事

南大東駕ハ後集海河由ルハ東経百三十二度十四分北緯二十五度五十三分在リ  
然レ今日本艦ノ測度ニ由テハ東経百三十二度五十分北緯二十五度五十分ヲ得  
其何レカ確實ナルヲ保シ難キト虽モ殆ト相符合スルヲ知ル、其固ヨシ長キハ  
之ヲ測定スル固ヨリ容易キ事業ニテ是ヲ以テ依世保軍艦ノ速カラハ節半ト見做シ

甲角より乙角に約ヨリ丙角に至る距離ヲ推測モ以テ余固ハ哩程ヲ知レト欲セシ  
 其岬角ノ著シキモノナク又速力ノ均一ナラサル等ノ為メ到底良果ヲ見ル能ハス  
 單ニ推測ヲ以テハ允ラズ長ク哩幅實ニ哩許ニシテ大底圖上ノ面積ト相違  
 ナキカ如ク其地勢ハ南西ヨリ北東ニ延長スルモノ如クナシモ實際其東西兩側ヲ直  
 航セシ斜路以テ察スルハ殆ト南北ニ涉ルカ如ク沿岸ハ惣テ岩石以テ成其水陸ハ稍  
 ヤ平面ノ岸ヲ廻ラシテ之ヲ歩行スル便ナリ之ヨリ以テ内方高サ十丈乃至二十丈ノ峻  
 岩壁ニシテ之ヲ登ル甚カ難ク是ヨリ次第ニ斜傾ヲナシ絶頂ニ至ルハ稍ヤ平面地勢ナク  
 此処檜櫟等ノ雜木樹群ガ君ニシテ繁茂スル見ル其地勢ハ地味多生息動物  
 ノ如キハ別紙汎遊遊負ノ報告ニ詳悉スルヲ以テ又斯ノ教育セス  
 北大東島ノ南大東島ヨリ北ニ七度三十分東ニ在リテ其距離九ノ六哩四十分三  
 ヲ隔ツ其面積ハ九南大東島ノ三分二ニシテ南西ヨリ北東ニ延長スルモノ如ク  
 沿岸ノ状況及島内繫サヤ雜木樹等モ南大東島ニ異ナルナキカ  
 如シ故ニ本島ハ別ノ人負ノ上陸ヲ試ムル

ラサ島に往來、海圖、由北片、東經百三十一度五分北緯二十四度二十八分  
 在り然レ本艦ノ測度、由北東經百三十一度十九分北緯二十四度三十分  
 二分三十秒ヲ得之又一回ノ天測、依ルヲ以テ其正確ヲ保スルニ足ラスト密ニ  
 正午時得タル經緯度ヨリ本艦進行ノ方位及里程等ヲ以テ察スル片  
 ハ本艦測定ノ經緯度ハ最モ真ニ近キカ如シ其延長及周圍等ハ  
 別ニ之ヲ測定セザリシモ凡ニ延長ニ哩幅員一哩ニ過キサルヘシ北大東島  
 ニ比スレハ遠ニ狭少ナルヲ知ル沿岸ノ狀況等ハ南北大東島ノ高宅モ異  
 ナル如シ又島内地物カ地味及穀類植ノ雜樹等ハ別紙に遺員ノ  
 報告ニ詳悉セルヲ以テ今斯ニ贅セズ

右報告ス

明治二十五年八月十二日

海軍艦長海軍大佐柴田矢八

佐世保鎮守府令長官林清康殿

# 南大東島探見報告

明治二十五年八月五日南大東島探見ノ余ニ應ジ  
 諸準備ヲ整ヘ午前十一時十分端艇ニ乗組ミ本艦  
 ヲ發シ海岸ニ近通シ其現狀ヲ觀察スルニ断岸絶  
 壁且ツ波浪海岸ヲ打テ敢テ近通スベカラザルナリ依テ  
 断岸ノ内稍階段アルヲ撰定シ海岸ノ波靜カナル場一町ヲ  
 見定メ端艇ヲ寄セ外艇艇ヲ使用シテ漸ク上陸ヲ遂  
 ゲタリ依テ小官ハ海岸ニ上リ時計ヲ閱スルニ既ニ正午ヲ  
 經過スルヲ十分餘(但シ此時計ハ昨日ノ正午ニ改正シタル者  
 ニシテ本日此地時計ハ此時計ノ正午ヨリ早シ)依テ天測  
 時機既ニ失シタルヲ知り先ツ居所ヲ撰定セント欲シ岩  
 上ヲ仰望スルニ断岸屹立高サ八丈餘其稍階段アルヲ  
 攀テ第二段ニ出テタリ然レニ此岩石ハ尺ノ面石花ヲ

ナシ尖針銳形ニテ手足直ニ之ニ觸ルハ急ニ傷ク  
 第一段ハ殊ニ甚ク高低凸凹常ナラス加之アタニ等  
 如キ級系茂セル灌木其面ヲ被ヒ歩行最難ク最危  
 險ナリ此間巨一鍵餘ミテ高サ十大餘ナリ是ニ於テ大  
 此処ニ躊躇セリ然ルニ至ル処此ノ如ク此荆棘ヲ  
 過キサレハ第三段ノ岩上ニ登ルハ熊ハサルハニ依テ卒ニル  
 所ノ水兵ニ命シ刀斧以テ此荆棘ヲ斬リ道ヲ開キ嚮  
 導セルハ彼等ノ勤作甚ク神妙ニテ暫時ニテ道ヲ開キ  
 第三段ニ達スルヲ得タリ此間木ヲ攀チ岩ヲ攀チ其  
 險難亦タズバカラス此第三段トハ即チ小官等ノ營所ヲ  
 定メタル処ニシテ此第三ノ岩石ヲ下ルハ枇榔樹林立  
 上ハ葉ヲ以テ覆ヒ下ハ枯葉敷キ連ネ歩行易シ依テ  
 此入口ニ營所ヲ定メタリ時既ニ午後一時四十分ナリ

而シテ用具ヲ此処ニ運搬セリ此日晴曇常ナラスト風モ風  
 波穏カナカニ為シ此間端艇員、助カヲ得大ニ小官等一  
 行ノ勞力ヲ減シタルヲ誠ニ幸福ナリシ今二時十分用具  
 運搬アリ、端艇指揮及艇員、別ニ告テタリ直テ天  
 幕張リ方雨露防禦居坐ノ撰定、掛トリ但シ茂ル  
 批柳樹ヲ切リ葉ヲ落シ以テ日光ヲ入レ空氣ノ流通ヲ  
 改メ天幕ヲ樹梢ニ掛ケ下ニ批柳樹ノ葉ヲ敷ク等種々  
 ノ手段ヲ施シ居所所假リ、整頓セリ時巳ニ午三時ナリ  
 依テ暫ク休憩シ今三時三十分九ノ三組、分レ各探察  
 出掛ケタリ

其一 小官及午秋候補生

其二 田邊少軍医 菊地一等水兵 吉跡二等水兵

其三 黒木一等水兵 高橋一等水兵

各午后六時道歸集約ス  
 其一、專ラ天測莫ラ搜索セト欲シ林中ヲ北西ニ進シタルニ  
 最高尖銳ナル岩石ヲ超セルニ二回後チ枇杷樹林中ヲ  
 進行スルニ午後五時半ニ至ルモ終始暗黒ニシテ日光ヲ  
 見ルナク又四方眺望ノ地ナシ況ヤ天測スヘキ地ニテラヤ依テ  
 轉回ニテ歸路ヲ就クモ位置置ト方向トヲ辨セス唯携帶セル  
 天測羅針ニ由リ方位ヲ定メツ、進行スルニ此間林中ニ於テ  
 一深谷ヲ見タルモ底ニ水ナシ今六時半過ニ至リ漸クニシテ海岸  
 岩上ニ出タリ顧ミシハ東側海岸ノ最北部ニ近シ依テ山石ヲ  
 攀チ木ヲ攀チテ海岸ニ下リ海水ノ洗滌スル所ヲ歩行ニ漸  
 クニシテ歸營ニタリ蓋シ此島ヲ經横ニ探究シ及サセト欲セバ  
 衣食携帶至ル処夜ニ入シ、就寢セサルヘカラサルナリ林中  
 三鳴其他ノ小鳥多クシテ人ニ驚クヲナク或ハ手ニ之ヲ捕



フルヲ得ヘシ又鳥モ稍ヤ同操ナリ最モ奇觀ヲ呈セシハ枯  
 木ノ根若クハ山石ノ下ニ穴居セル大蟹之レナリ其形奇異  
 ニシテ甚タ大ナリ海岸ニ群集スル魚類ハ異色異形ノ者  
 多ク鮪ノ如キ者ニシテ黄色ナルアリ青色ナルアリ又鱈多ク又  
 海岸岩上水ナキ所ヲ跳飛スル小魚アリ其他林中ハ獸  
 類ヲ見ス蛇類ヲ見ス蜂類ヲ見ス唯蟬ノ鳴ク声アリ蟻アリ  
 蚊アリ蜘蛛アル而已土質ハ古葉ノ腐レタル者ニシテ深谷ノ側  
 壁ニ苔ヲ見ルニ層ヲナストナシ林ハ皆枇榔樹ニシテ高所ヨリ  
 見ルハ地ノ高低ニ係ハラス樹葉一面平坦ニシテ下ヨリ見ルハ  
 樹幹林立ニ長キハ三丈餘ト思ハル低地ハ徑ヲ長ク高地ハ  
 徑ヲ短シ此樹間ニ成長スル雜木アリ其幹長クニテ高シ然レモ  
 其数多カラス大概是等ハ葛類ニシテ有用ノ木ナシ故  
 全ク枇榔樹而已云々又林中ニ一ノ燒跡ヲ見ル其周

圍頗ル廣ク東海岸ヨリ北海岸ニ出ツサ蓋ニ漂泊人ノ處  
行ナラシカ其状已ニ古カ如シ

其二、林中ヲ進行シ凹谷ニ筒ヲ見ルモ水ナシト報セリ其他  
異ナルヲナシ又蝙蝠一足ヲ捕ヘ来ル

其三、林中ヲ進ミ稍南方ノ海岸ヲ傳ハリテ歸来ヒリト報セリ  
別々官等ノ目撃事スル所ト異ナルヲナシ

夜ニ入りテハ細少ナル蚊ノ夥シク来リ籠衣ヲアリ依テ四面ニ火  
ヲ燃シ之ヲ防ク又大ナル蟬出表ルアリ又鳥梁ノ鳴ク声ヲ聞ケル

其他異事ナク四面頗静ニシテ声響ナリ唯波浪ノ海岸ヲ  
打ラ聞ク而已依テ奇異動物ノ居ラサルヲ益信シタリ

六日午前七時半更ニ組ヲ分ケ内地ニ派遣シ午後三時迄  
帰營ラ入申ス

其一 菊地一等水兵 古跡二等水兵

其二 黒木一等水兵 高橋一等水兵

其一 海岸ヲ北ニ向テ進ミ其二 天測矣ノ上ニ木標ヲ建テ居テ

南ニ向テ海岸ヲ進ミ其一 二相會合シタル居テ山中ニ入ルハキヲ

命シ小官ハ午秋候補生ト共ニ東側海岸ノ中部突出ノ所ニ於

テ太陽ノ高度天測ヲ行フ(即チ木標ヲ建テ凡岩ノ下方ナリ)此日昨日

今々晴曇常ナラサルヲ患フト虫ハ漸ク午前及正午ノ天測ヲ成スヲ

得テ正午過キ黒木高橋二名歸来リ報シテ曰ク南海岸ハ段

々西方ニ近ク隨ヒ新崖絶壁ニシテ激浪之ヲ打テ進モ近通スハ

カラス又攀テ登ルル能ハス之ヲ經テ余島一周進モ見込ナキニ

依リ歸リ来レリト別ニ獲物ナカリシ依テ之等々余ニ歸艦ノ準

備ヲナサシム午居二時比ヨリ驟雨連リ至リ黒雲常ニ天ヲ覆

ヒ日光ヲ遮リ終ニ午居三時半ニ至ルモ天測ヲナスル能ハスレテ

歸營セリ小官等歸營シタル既ニ北方海岸探究ノ菊地

古跡二名モ歸リ居リ其報告依ハ北東岬端ヲ廻リ北  
 海岸ヲ行ク十五町許ニシテ海岸岩石上ニ難破船ノ碎片  
 多ク「ウインドラス」「スチールワイヤ」「ブロック」「ヤード」「バンド」其他管釘  
 等ノ類アリ又行ク十町余ニシテ海岸ニ岩石ノ間ヨリ落ル少量  
 ノ生水アリ二三升ノ水一時取得ヘシ由テ一瓶ヲ携ヘ来レリ  
 後チ之ヲ試験スルニ塩分多ク飲料ニ適セス然レモ已ムラ得ザル  
 場合ニハ又飲ムヲ得ヘシ彼二名ハ右水源ヲ索メント欲シ岩上ニ  
 攀チ上ルニ其上ニ少シク雜草ノ生シタル原野アリ又林中ニ入ル  
 三町余ニシテ凡ソ深サハ丈余トモ思ハル谷アリ其底ハ暗黒ニシテ  
 視力ノ達セサルカ如シ依テ之ニ下リ見ルニ全ク乾燥シテ水分ナシ  
 依テ愈此近傍ニ池沼等ナキヲ信シタリト云フ然ルニ彼等ハ時  
 已ニ午後一時半ナルヲ知り歸路ニ就カント欲シ海岸ニ出テタリ北  
 西岬端ニ達セサル十數町依テ過般沖繩縣廳ヲ建立

セリト云へん木標ヲ見サリト云へり又北大東島トノ間底質  
岩石ノ形状ヲ海面ニ現色シ居ルヲ見タリト云へり而シテ破船  
ノ細片等少ク携フ帰レリ

当日小官等ノ目撃事スル所ニ依リ海潮干満差ハ五呎許ナリ  
但シ此日ハ大陰曆十四日ニシテ高潮ニ近シ又東海岸ハ稍湾形  
ヲナスカ如シト雖モ東風アルハ怒濤岩石ヲ打テ敢テ近クハカラ

サルト必ス然レモ當日ノ如ク南西若クハ西風ニ天測真北方ニ  
在ル稍突出シタル岩端ニハ端舟ヲ寄セ得ハク又海水清澄  
ニシテ海岸近傍ハ水深四尋余ノ処ヨリ底状ヲ見ルヲ得

海底ハ尽ク廣大ナル岩石ニシテ砂泥ヲ見ヌ又海岸岩石ノ  
凹部ハ金ク砂ノ堆積スルナク唯貝壳アル而已天測真ハ東

岸ノ中央突出部稍平坦ナル岩石上ニシテ北大東島  
東端ヲ北二十七度三十分東南大東島北東山角ヲ北

十五度東、其南方、山岬角ヲ南二度東ニ見ル位置

ニ在リ水面上二十呎ノ処ニシテ天測ニ由リ九ノ経緯度ヲ得タリ

北緯二十五度四十九分四十八秒 東経百三十一度十四分

四十二秒

当日ノ目撃事ニ由リ潮候時ヲ算出スル一丸ノ如シ

潮候時凡ソ五時

天測莫、背面山石ノ上ニ建ラタル木標ニ大日本帝國軍

艦海門ト記シ北面ニ六月日ヲ記シ兩側ニ北緯及東経ト

而已記セリ

七日朝天候快晴ナルヲ見テ同喜色ヲ呈シタリ然ルニ午前

六時四十五分砲声ヲ聞ク今七時二十分端艇来ル今八時四十

五分岩上ノ營所ヲ引拂フ此營所ヲ引拂フニ當リ其跡

一同ノ官姓名ヲ記シタル木標ヲ建テ置テリ又別ニ島内ノ摸

帰艦ス  
 抑モ此度ノ探宥ノ險難ナルヲ豫想外ニ出ラ且ツ時日ノ制限  
 スル所アリテ遂ニ其切至リ尽サル所アルヲ遺憾トスル処ナリ  
 蓋シ此島ハ水ニ乏シク為ノニ動物ノ生活ニ難カル可シ故ニ過  
 般沖繩縣ヨリ故牧セリト云ヘル獸類等モ皆渴ノ為メニ死セ  
 シ者ナルヘシ又林中ニ生スル樹木ノ中菓實ヲ生スル者ナキヲ以テ  
 見ル所ハ必ス此島ハ水分乏シク人其畜ノ生殖ニハ不適当ナル  
 可シ加之全島ノ周圍斷崖ニシテ港灣ナク且ツ海岸ハ波浪  
 激シク舟ヲモ容易ニ近ツクベカラス為メ島内ノ通運最  
 不便ナリ依テ此島ヲ開クハ最困難ナル事案ナル可シ  
 右及報告候也

明治三十五年八月十日

海軍少尉志摩猛

海軍艦長海軍大佐柴山矢八殿



報告書

小官儀

明治二十五年八月四日大東島探検者ヲ上陸セシムル  
為ノ第一「カタ」ノ指揮ヲ命セラレテ尤ノ要旨ヲ訓示サレ  
一 汎出員上陸セシメ直々ニ帰艦スヘシ

一 若シ本艦ヲ离ルノ后々般艦ニ触ル場合アラハ般  
海士ノ一行ト陸上ニ停マルベシ(航海士一行トハ  
探見者トナリ)

但シ危険ヲ冒シテ上陸ヲナサシムヘカラス

由之觀見ルモ余ノ任務ヲ遂クン能ハサレハ探見其功ヲ  
全スルヲ得ス是上陸ノ日ノ天候如何ニ由ルト魚モ鰐ノ尤ノ用  
意ヲナセリ

本艦沖繩ニアン中ニテ聞ク該島ハ沿岸岩礁羅列加  
到ル斷崖静浪常ニ沿岸ヲ洗ク、以テ着岸ハ小舟

非ラカハ甚タ危儼ナリト

之ヲ以テ端艇ハ岸ヲ高シ置キ其間ニ索渡ミヲナス考

ヲ起シ丸籠ノ用意ヲナス

一三十間余ノ古索 二條

一「スナツチブロツク」 一個

而シテ波浪甚シカラサル中ハ渡舟トシテ外艇ヲ用キ甚タシキキハ

的板ヲ以テ棹トナシ以テ代用スルヲ決心ス

時維八月四日大島探檢自的ヲ以テ本艦沖繩ヲ出テ

五日大東島ニ到着、預定ニテ進行ス此日端艇、丸ノ

用具ヲ積ム

探見者用具 全

水筒 八個 水量 一石許

端艇員ハ万一ノ為ノ糧食及水二日分ヲ積ミ込ミ推乃帶

品トシテ水筒、フラスコ、上一枚、脚絆一組ヲ用意セシメ  
 服、装ハ、事業服、ストローハット  
 由之積載、量ヲ見ルニ端艇、軍装、時、量ヲ少シクシテ  
 已

翌五日午前八時頃ヨリ水車面、大東島ヲ望見スルヲ  
 得タリ此日天氣晴朗西風力甚タ微ナリ漸ク陸岸ヲ  
 六果シテ沿岸花礁、波浪ノ洗ッ所而已一ノ沙岸ヲ見ス  
 以上南大東島ノ西岸ト北岸トノ現狀ナリ次テ艦、徐カニ  
 南北兩島ノ間ヲ過キ西岸、一ノ灣形アルヲ知リ之ニ近  
 寄ルルヲ殆ト一哩半陸岸ハ即ク風下ノ岸、波浪モ亦タ低  
 キヲ見ル由テ外艇ヲ引キテ上陸スルヲ決シタリ次テ第  
 一カター用意及、外艇、用意、令ニテ第一カターヲ卸シ  
 外艇、艇ヲ引キ本艦ヲ離ルル正サニ午前十一時十五分是

ヨリ漕ぎ十一時五十分湾内へ入ル此湾入港カハ五十間許  
 リト思ハル陸岸ヲ見ル花礁高低アリ端艇自ラ着岸  
 不可ナルヲ知り十二時水深四尋為岸ノ所投錨ス時  
 静浪常礁岸上下ス直々外艇艇上陸員ト艇  
 員ト四名ヲ載セ古索ヲ陸岸ニ運ビ艇尾ト沼岸トノ  
 間ニ舟渡シラレド

此時注意スヘキハ陸岸ハ静浪上下ノ為ノ洗淨セサル高サタレ可キ

此渡シ由ラ陸揚ケラ終ルト虫モ尚樹林ニ連ル道岩礁凸  
 起然ラケレハ小樹縦横ニ交叉シ上陸人甚タ困難ナラ  
 以テ艇員半數ヲト一陸セシメ道ヲ開キ要具運搬ラ  
 助ケ遂ニ樹林ニ達スルヲ得別シ告ケテ帰艇マ樹林ノ  
 口ニハ軍艦旗ヲ建テ目標トス時ハ午右二時ナリ而シテ水  
 帰艦道ノ量ラ残シ他ハ比大陸揚ケレ樹木ノ見本ヲ積ミ





# 報告書

小官儀

明治二十五年八月七日軍艦海門ヲサレ島ヨリ大東島ノ  
 西岸ニ近寄リ陸上汎出員迎ヒノ為メ午前六時五十三  
 分第一「カタリ」ヲ出ス余之レカ指揮ヲ命セラル「第一「カタリ」  
 三糧食一回分ト其他ハ前回ト全ク用意ス外艇艇ヲ  
 引キ七時三十分着岸其方法第一回ト全ク此日天  
 候好風波甚タ微ナリ着岸店陸上員未タ出テ未  
 ラス由テ根拠地ニ到レハ朝食ノ時サレ終ラントスルノ由テ  
 艇員半數ヲ上ヶ汎出員ヲ助ケ器具ヲ片付ケ運搬  
 送事セシム午前九時三十分端艇ヲ積ミ終リテ離岸外  
 艇艇ヲ引キ帰船時午前十時十分也  
 右及報告候也

明治二十五年八月八日

海軍少尉 松井 健吉  
海軍艦長 海軍大佐 紫山 英八 殿



南大東寫探究報告

明治廿五年八月廿日午前十時大東島沖合に着艦水官志テ少尉千秋候補

生々水兵四名ト共ニ瑞舟ニ塔レ該島東岸南端ニテ島中尤モ上陸シ易キ

部位ヲ撰ヒ瑞船ヲ陸ニ附ヤシト欲セシモ己ニ沖邊縣ノ敷ゼレ如ク沿岸到

ル廻断岸地壁(貝巖殿負ハ武珊瑚置積シテ化石ニナルモノヤラセカ)ニテ容易ニ

近クカズ依テ豫ノ(曳キ来リタル外船ボートニ由リ漸ク上陸セリ)上陸員ハ前

日ヨリ兼テ規厄涅〇ニ五ヲ三回量トシ服用セシノ此日又上陸ニ先テ更ニ

全量ヲ結トス

瑞舟ノ陸ク近ク達シタルハ午前十時五十五分ナリ此日ハ天気晴朗ナリシモ時々

黒雲天ヲ蔽ヒ或ハスコールノ来ラシトスル模様アリ為ニ炎熱家モ蒸スル如ク

寒暖計ヲ換スルニ九十二度ナリシ

上陸後先ツ二日間ノ住居ヲ定ムルコト尤モ必要ナリト思考セシヲ以テ何レモ其地

ヲ撰定セト見廻セ其海岸ニ終テ前ニ速タルカ如ク断崖絶壁ニテ高キニ

百尺位ナリ二百尺位加エテ阿且橋(内地ノ島身者ノ如クモラ)ニ生シ若易ク上ルバヤ

ウス殊ニ沿岸ノ巖質ハ軒起シテ殆モ針ヲ立タルト異ナラス又何レノ節位ヲ見ルモ一  
 滴ノ水カラムモ含マハカガ為メ岩石皆々熱灼レ例ヘ水ヲ注クモ一瞬時モ止ルナリ  
 直ニ収乾固シタル為ト之ヲ互射スル熱氣ト日熱ト由リ實ニ名振スベカラ  
 ガルノ酷暑ヲ覺ヘタリ漸クテ阿且橋ノサナキ一テ処ヲ見出シ岩ヲ突リテ矢々固  
 維丈モノハ之ヲ碎キ樹木ノ繁茂シテ妨害トスモノハ之ヲ伐採シテ路ニ敷キ頂上  
 ニ達スルヲ得タリ爰ニ全島ヲ覽見スルニ綠葉蒼蒼然トシ殆モヒロ樹(杉松)  
 シ以テ全島ヲ被フカ如ク頂上ヨリ少シク降ル地面平坦ニ処アリ此処又ヒロ樹  
 繁茂シ其葉互ニ交叉シ樹叢若トシテ天日ヲ見ルヲ能ハズ昼尚ホ暗キヲ覺フ  
 先ツ此処ヲ假リノ住処ト定メ第一着ニヒロ樹ノ葉ヲ拂ヒテ風々光涼ノ通途ヲ  
 能クシ而シテヒロ樹ニ天幕ヲ張り携テセル物品ハ終ラ爰ニ運搬セシメ其  
 道傍ノ一高処ヲ撰レテ之ニ軍艦旗ヲ立ラ目標トシ全備成レルノ后一行ヲ二  
 三伍隊ト為シ島内ヲ巡見セシメテ企圖ス乃チ午後三時ナリレ  
 総員七名ヲ三組トシ志ナサ尉及チ候補生ハ天測ノ地ヲ定メテ為メ島ノ南西

ガラ海岸に傍ラテ出ラ高橋及黒本ニ水兵ハ東南方ニ向ヒ本官ハ菊地及古  
 跡ノ水兵ヲ伴フテ北方ニ向フテ進行セリ尤モ惣員ハ午後七時迄ト帰ラシフ  
 ラ約ス

本官等ノ向ヒタル処行ク一町許用ヒ峻岨ハ珊瑚巖石ヨリナレル高所アリ之ヲ  
 攀ヒ昇ルハ且タ困難ナリシモ漸クニシテ且絶頂ニ到ルヲ得タリ四方ヲ見渡スコ索  
 島内最高処ナラシカ満寫青クトシテビロ樹ヲ以テ被ハク操シ且葉ノ上面ヨリ  
 見得ベシ此途中ニ於テ一種ノ蝙蝠ヲ得タリ又此近傍ニ於テ藤豆ニ美スル葉  
 豆一種ノ蔓草ニ生リ既ニ熟シテ枯落セルトスルヲ見其三個ヲ携帶シ帰リ  
 是ヨリ再び隊トバビロ樹ノ樹對茂セルヲ未タ日ハ西天ニ輝クモ何トモ暗室  
 入ルル思ヒアリ途上先行者ハ一刀ヲ午ニシ前進ニ横ハル荊棘ヲ切り開キ樹間ヲ  
 漸ク進行ス此間目ノ蝕ルモノハ危ノ如シ

樹木ハビロ樹(持松) 藤(外見ヤケト葉ニ此葉) 榕(茂ク樹ヲ傍ラ生ス) 栞(茂ク此ヲカケテ生シ一葉極)  
 柏(葉ハ互生シ樹ノ直ニ) 豆蔓(樹ノ葉ニ生シ) 阿且樹(葉厚シ地ノ方手背ト生シ)

一種、小樹(葉は極多の内に地は白ツレに美し) 等あり

鳥妻ハヒヨ、目白、鳥、カモノ、鷲、馬鹿鳥、又時々鳥啼声ヲ聞ク

魚妻ハ鰻、鱈、油子(北浦道ノ油子ト)、草魚、朝ノ数、数多又一種ノ鰻

了人然し能々、口ハ水アキ地ヲ腐ラシ海ニ入ル其他魚、赤色、黄色、青

鱈、大魚妻ヲ見ル

貝妻ハ数多アリハ一々名ヲ知ラザルヲ以テ撰テ常々見ル所ヲ示シ

虫妻ハ蟻、蚊、小青色虫(ハツタ、マ)、及山解(地魚能擇シ之類也)

彼ノ状々ノ尤モ懸念シス毒蛇ハ本島ニ棲息セスト思ハラス

獸妻ハ絶ヘラ見ラズ

尚且進行シテ始ト一哩、入モ島内ノ模様其モ変化ナリ途中ニ水ノ溜溜セ

箇処アキヤト特ニ注意セシモ地ヲ之ヲ察見セズ但し処々一周ニ二向テノ山

先場所アリ其中ノ島ハモ崖面ハ狹冊湖石ヲ成リ雨ニ天水ノ溜溜スヲアリ

モ今ハ一清ノ水ヲモ見ズ更ニ方向ヲ東北ニ轉シ進行シテ海岸ニ出テ全ク

樹間隱暗り天日ヲモ見ルヲ能ハズガ故シ今ヤ如何ノ方向ニ進行シ居々之ヲ  
 知ル苦ナリ又歩行困難大筆紙ヲ終リ尽ス所ト非ズ進行スヲ數テ三シテ  
 彼ノ密巖石ノ高處ニ進セリ先此頂上ニ於テ方向ヲ定メテ欲シ意見花初メラ  
 且海岸ニ近キマヤルヲ知リ愈進シテ終ニエト吾等モセシ部位ヨリニ松野崎  
 北方ノ海濱ニ出テ之ヲ岸ヲ傳フヲ帰路ニ就ケリ海岸ノ様ニ經テ前ニ  
 陣支キト異スナリシ既ニテ天幕内ニ至リシハ午後六時四十分同時寒暖計  
 ハ九十度ヲ示レ風ハ全く無し茲ニ夜自ラヨリ

天幕内ニ約床ヲ約リ光明ヲ兼ニ六燭燭ヲ用ヒタレ既斷クテハ我テラ覺ヤス  
 モ際限ナキヨウシテ炬火ヲ製セシト欲シヒリ樹ノ枯葉シクモヲ採集シ何ヤモ  
 充テテ法更リ得ザリシ依テ其枯葉ヲ集メテ火ヲ放ケシニ忽チ馬トシテ諸方ニ  
 燒シ之カ爲メ却テ大ニ凡ク生シテ冷気ヲ去ラシ幕内ハ明リ又最初天幕内ノ  
 周圍ニ彼ノ山麓ノ匍匐シ来ラテ然カウ驚カセシモノ今火ヲ放シヨリ来ルヲ去リ  
 又救ノ群集セシモノモ一救シ去リ終ニ其子獲ニ睡醒シ得テ此夜十時三十分莫ク

暖計八十六度夜間時島ノ声ヲ聞ケル一竹ノ衛生煙ヲ配付ス

六日九時着樽今時寒暖計ハ八十四度朝食ヲ付ハ六時半ニ多ク角ビ隊伍

ヲ分ケ志ナク射及ケ候補生ハ天測ニ寄ラ古路ヲ為地ノ島ノ北方向ニ

高橋ヨ里家ハ天測ノ概概ヲ違ビ樽板ヲ建リ後ニ南方ニ向フ本官ハ独リ後

意島内ノ状況ヲ探シトモ

島内ノ概概ハ昨日ト異ナラス故ト本官ハ午前工時一先天幕ヲ帰リ寒暖計

ヲ見ルニ九十九度暑熱ハ本日ニ多ク一層甚ク少ク歩行之ハ忽チ発汗シテ

宛モ流汗ガ妙ク随テ渴甚ク又島内ヲ歩行スルニ随テ常ニ多ク歩行シテ

忽チ空腹トシ瓦 固ク口ニ適スルモノナリ唯モ口ニ佳味ヲ覺スモノハ飲水ニ

正キ多ク寒熱計以テ昇騰シ後ニ百度ニ至リテ天幕下下リテ高橋ヨ

里一ノ百歩ヲ進ムルハ便ニ之ヲ甚クシテ其境ヘハ亦亦暑トシテ

本官ハ前夜ヨリ熟睡セガルヲ以テ一睡ヲ權セニ午台ニ時半頃ニ至テ驟雨沛

然トシテ来リ是ヨリ大ニ冷元ヲ覺ヘ寒ノ暖計九十度ノ降リ夫ヨリ本官ハ

直、海岸にまゝ午後六時頃帰ると、諸方に出来ぬ諸員を尋ねて皆帰来し直、  
 夜食に就けり同時諸員は衛生酒を配給す此夕寒暖計八十七度あり  
 南方面に出たる黒木及高橋の見し如く、秋波前日と異なりナレ淡水は一点滴も  
 湧出又満溜せんと見たり唯午潮時海水は岩石間と残りたるも漸次日  
 熱に由り蒸発して天然に食塩を結晶して残し去るを見しものとち  
 北方面に出たる古跡及菊地に迷はん如く亦夕概に前者と異なりナキも彼等ノ  
 多如く由れば見たり北方海岸に四五町程ありし海水を打上ぐらん所僅  
 水は点滴スルヲ見たり由り試み其水清ヲ味フに塩味甚々少なり海水は自ら  
 異なり如くアルヲ以テ之ヲ瓶に取リ持来レリ但し其滴漉せし極少量ニ指ヤ  
 一時許ラ費ヤレシ漸く瓶ノ半ハラ満タセリト多ク到底飲水不足ノ場を臨  
 んで見要ヲ為さんし其試験成績は右ノ如し  
 無色透明ノ無臭之塩味あり(海水と比して六十分の一)及應ニ少ク粘性ニ  
 硫酸石灰、重碳酸、硝酸、亜硫酸、重炭酸等ありし





朝食ヲ候ハラハ本艦ノラツク島ヨリ帰リ来ル号砲ヲ聞キ其支度ト掛ラ  
レトエマ直ニ本艦ノ端艇来ル由ラ一行皆ナ帰艦セリ

右及報告候也

軍艦海門章目

海軍少軍醫 田邊貞次



海門艦長 柴山矢八郎